

添付資料 3

東京大学再現性調査委員会の最終調査報告に対する所感

2006年3月29日
東京大学大学院工学系研究科
教授 多比良和誠

明日3月30日に、東京大学工学系研究科調査委員会の再現性に関する最終調査報告が出される旨のご連絡を松本委員長からいただきました。

私は、3月23日段階での調査報告(案)を拝見しておりますが、最終調査報告の内容を拝見しておりませんので、最終調査報告に対する意見の詳細を述べることは、この際、差し控えたいと考えております。

既に、これまで様々な機会で申し述べましたとおり、一連の問題は、各論文の実験担当者であった川崎助手が、本来は当然に厳重に保管しておくべき実験ノートを発見・提出できなかった事実起因するものです。これは、私の川崎助手への信頼と、研究管理の不十分さが招いたことで、責任を痛感しており、倫理的な責めは、私も負担するべきものと考えております。

そのため、既にご報告いたしましたように、問題の指摘から約1年が経過した現時点においても、川崎助手によって、実験ノートが発見されていないという研究倫理上の問題を理由として、4報の共同著作論文について、私は、その責任著者として、2006年3月26日付けで、各論文を掲載した科学雑誌の編集者に対して論文を取り下げる旨の連絡を行っております。

なお、私は、4報の各論文の責任著者であり、一つの論文では共同責任著者ともなっている川崎助手に対して、この間、論文の取り下げの同意を取り付けるため、説得してまいりましたが、同意を得られなかったことは、重ねて遺憾に思うところです。

今回、川崎助手から調査委員会に対し、3月27日付けの意見書が提出されているようですが、私及び私の代理人弁護士(虹の橋法律事務所)は、その作成には一切関与していません。また、この川崎助手の意見書には、私の意見とは大きく異なる内容が含まれています。

調査委員会の調査報告(案)でも指摘されていたところですが、論文12に関して川崎助手が生データとして提出しているDNAシーケンシング結果の印字データに関して、私がソフトウェア開発関係者に直接確認したところ、川崎助手が当該データを印字したと述べている当時には、川崎助手が使用している配列データソフトはリリースされていなかったという指摘がありました。そのため、川崎助手の述べている事実には大きな疑義が生じざるを得ず、川崎助手から調査委員会に提出された生データにも疑義が持たれることにつき、大変遺憾に思っております。

私としましては、今回の調査委員会の調査報告(案)を見ましても、科学的には、各論文に関する川崎助手の実験におけるミスコンダクト(捏造)の有無につき、完全な検証には至っていないと考えておりますが、現時点では、川崎助手が実験ノートを提出できず、再現性の実験においても成果が得られていないことから、川崎助手の実験に対する誠実性には、疑義を持たざるを得ないと感じております。

最後になりますが、今回の一連の問題に関し、東京大学ならびに調査委員会の委員先生方には、多大なご迷惑をおかけしましたことを心より重ねてお詫び申し上げます。

以上